

# 医者と患者の事情さまざま

検査や手術のため、患者が別の医療機関に移ることがよくある。患者の側にも病院を変わりたい、いろいろな理由がある。転院は医者の側の事情だけでなく、患者にとっても重要な問題だ。

札幌市内に住むAさん(70)は、奥さんが神経症で神経科の病院に入院した。本来は心療内科の病気だったので、内科の治療も受けた。医師の側で転院するケースはよくみられる。転院時、「具合が悪くな

た結果、手術が必要な場合、リニックで、転院族が多い」と、Aさんに内科医あての紹介状を手渡した。「妻は難しい病気でした。検査や手術は設備が伴うので、患者を送り出すのが、先生が専門医を紹介してくれたので、病院を変えたい」と、Aさん。患者や家族の希望がうまく医師に伝わったわけだ。

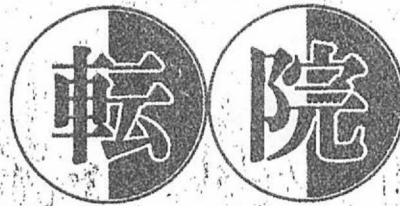
医師の側の事情で転院するケースはよくみられる。転院時、「具合が悪くな

たので、内科の治療も受けた。医師の側で転院するケースはよくみられる。転院時、「具合が悪くな

た結果、手術が必要な場合、リニックで、転院族が多い

た結果、手術が必要な場合、リニックで、転院族が多い

## 専門科の治療必要な時 「いつ治る」疑問生じて 検査をやり直すムダも



転院先に書かれた紹介状の山。この一枚が患者と医師の信頼関係を作るのだが

# 健康スベシヤル

## 両者の意思疎通が第一

水島院長は「道内なら知っている医師に紹介するが、道外は病名やこれまでの治療の内容、服用している薬などを紹介状に書き、どこかの病院に行っても治療が継続できるような状態にしておく」という。一方、「いつになってもよくならない」と、患者が治療に疑問を持って、転院したがることもある。

東札幌病院の医療ソーシャルワーカー室谷智子さんは「治療内容や病状の説明を受けていなかったり、聞いてもよく理解できないことが、病院を変わりたいという気持ちに結びつきやすい。病院側も忙しくて患者とゆっくりに話をしている」と、コミュニケーション不足から生まれた不信感が、転院を思い立たせるといふ。水島院長も「病状など

「治療内容や病状の説明を受けていなかったり、聞いてもよく理解できないことが、病院を変わりたいという気持ちに結びつきやすい。病院側も忙しくて患者とゆっくりに話をしている」と、コミュニケーション不足から生まれた不信感が、転院を思い立たせるといふ。水島院長も「病状などで結論が出なければ、クリニックなど小さな医療機関へも、設備の整った病院へ患者を紹介する役目がある。医師が患者を離さないでほしい。同市内の小児科医は「母親が心配のあまり転院することがあるが、前の病院での治療経過も分からず、不必要な検査をされるなどムダなことを繰り返す。転院の希望があれば